

3 庄内農業高校生の卒業後の動向－山形県酒田市木川集落の事例を通じて－

東洋大学大学院 牧野修也

これまで農業高校は、その主たる目標を、①営農後継者の育成、②地域リーダーの育成、の2点に絞り、その2点からのみ評価されてきたといっても過言ではない。近年、産業としての農業の地位の相対的低下に伴い、農業高校が、地域社会から受けける評価も低下している現状がある。しかしながら、嘗ては、地域社会を担うものが通う学校として評価され、戦前においては、手作地主の子弟が、戦後は、高度経済成長期辺りまでは、農家の長男が通う学校として、地域社会から認識されてきた。庄内農業高校は、水田単作地帯として著名な庄内平野のほぼ中央に位置する東田川郡藤島町に所在する学校で、明治34（1902）年に、甲種の実業学校である庄内農業学校として創立された。庄内農業学校・庄内農業高校は、これまで多くの農業後継者を育成してきたことは、多くの農業高校がそうであるのと同様の事実としてある。地域リーダーの育成という点から見ても、①自治体の首長や市町村議会議員や県議会議員などの政治的分野でのリーダー、②農協理事などの産業的分野でのリーダー、③村落での相談や議論のときに中心になるという意味での部落内リーダーとして活躍している卒業生も多い。但し、③の場合のリーダーという場合、必ずしも役職者というわけではない。具体的な役職に就いていなくても、集落の者から相談を受ける、または、アドバイスをするという意味で影響力を行使しているというケースもみられる。

このような状況を生み出す背景としては、農業学校が、手作地主の子弟がいく学校ということで、非常に志願者が多く、地域社会の人からは、ある種の「エリート学校」として認識されてきたこと、そのことによって、卒業後に、集落内の家格から種々の役職に推されていくことで、リーダーとして育成されていくという側面がある。だが、高度経済成長期以降に関しては、農業基本法・構造改善事業が象徴される農業政策や減反の他、後期中等教育レベルにおける農業教育での「自営業者育成高校」政策による実習重視の影響もあり、次第に、志願者の減少と学校への評価が低くなっていく。

本報告は、このような背景を踏まえ、ある農業高校卒業生のライフヒストリーを辿ることで、戦後の庄内農村の変容を、どのように捉えられるかどうかを試みていきたい。